



↑全体会場前にて。

左より駒野・津崎理事・堀江副会長・菊川会長・廣瀬副会長

2022年9月3日

北海道PTA連合会

副会長 廣瀬 堅一(第1ブロック)

副会長 堀江 博貴(第2ブロック)

副会長 駒野 圭史(第3ブロック)

日時:2022年8月27日 9:00~12:30

会場:山形市総合スポーツセンター

第70回 日本PTA全国研究大会 山形大会 『人と人とのつながりを体感しよう』

～あがらっしゃい精神の山形から～

全体会 記念講演・記念演奏会 参加報告

この度、北海道PTA連合会を代表して、菊川会長・第1ブロック廣瀬副会長・第2ブロック堀江副会長・稚内白川代議員・第3ブロック駒野・石狩津崎理事、そして事務局が参加しました。

大会自体は6,500名の参加があったと報告があり、2つのサテライト会場をのぞき、本会場には3,000名は集まっているのではないかと感じました。

2日間はあるという間で、楽しく、そして人と人とのつながりを体感できた研修でした。

山形の方言『あがらっしゃい』は、「どうぞいらしてください」「どうぞめしあがってください」というおもてなしの言葉という事です。その、おもてなし精神から全体会は素晴らしいアトラクションから始まりました。

国内唯一、ひとつの県を流域とする一級河川の最上川を有する山形県。そして神聖な山々をそびえ持つこの地特有であろう天狗の格好をした修行僧の『ほら貝』演奏から始まりました。

ほら貝には無病息災・家庭円満の思いが込められているという事でした。

その後、日本レコード大賞で企画賞を受賞された『朝倉さや』さんの『民謡』は圧巻で、最初から最後まで鳥肌が立ちっぱなしでした。

そして、開始前からのぼりが立っていた『徳内ばやし』は高校生の演舞で躍動感にあふれ、『花笠踊り』は山形大学生の華麗なパフォーマンスで会場の目をくぎ付けにしました。

アトラクションはあっという間に終わり、記念講演前の開会行事に移行したが、今大会である山形大会から来年開催の広島大会への引継ぎが行われました。

広島大会の紹介動画で、厳島神社から始まり、戦艦大和、原爆ドーム等の映像が流れたのち、6つの分科会と2つの特別分科会の全8分科会で行われるという事でした。

2023年8月26日(土)～27日(日)で、広島各地で行われるという事です。

そして記念講演は、山形が全国に誇る【山形交響楽団】の指揮者、飯森範親氏が登壇されました。私はあまり音楽に造詣がないもので簡単な紹介となりますが、山形交響楽団では2003年に音楽監督、2014年から芸術総監督に、2022年からは桂冠指揮者となりました。ところで、桂冠はご存じでしょうか？恐らく月桂樹の葉で出来た冠という事だと予測します。月桂冠は古代オリンピックで勝者の頭に載せたのが起源だったと認識しておりましたが(違っていたらごめんなさい)、その意味からも名誉ある称号なのだと想像がつきます。

飯森氏の生まれは神奈川県の実業家で、そのまま関東圏で生活されていたが、縁があって山形の小さな公民会館で指揮を執り、その時の山形県民の【あがすけ】(出しゃばらない・自慢しないという意)な特性に心惹かれて、今に至るという事を仰られていました。

そして飯森氏の『あがらっしゃい精神』の根本は、ご両親の『感謝の気持ちを持つだけではなく、口に出すこと。お礼を言われて嫌な気持ちになる方はいない』との言葉に感銘を受け、現在も実行しているという事でした。

さいごに、『オーケストラをはじめ山形の良さを他県に紹介しようと全国で山形交響楽団の名前を背負って頑張っている。このコロナ禍を乗り切りために人と人とのつながりを大事にしたい。そして人に対する感謝の気持ちを大切にしていきたい。この話をこれからの生活に役立てていただけたらありがたい。』と締めくくり、その後45分にも及ぶフィルハーモニーを体感させていただいた。

お恥ずかしい話、プロオーケストラの生演奏は初めて鑑賞させていただいたが、是非お金を払って、座り心地のいい椅子で、もっとラフな格好で聞きたかった…。と思えた45分間でした。

飯森氏の1本のタクトから、多くの全国の来場者と『つながりを体感できた』貴重なひと時でした。終わりになりますが、山形大会の運営に携わった多くの方々に、心より感謝申し上げ、日本PTA全国研究大会山形大会の参加報告といたします。

報告：北海道PTA全国連合会

副会長 廣瀬堅一(第1ブロック)

副会長 堀江裕樹(第2ブロック)

副会長 駒野圭史(第3ブロック)

以上

第70回 日本 PTA 全国研究大会

山形大会(特別第2分科会) 参加報告



↑左より駒野、廣瀬副会長、菊川会長、堀江副会長(入場前の記念撮影)

北海道 PTA 連合会

副会長 廣瀬 堅一(第1ブロック)

副会長 堀江 博貴(第2ブロック)

副会長 駒野 圭史(第3ブロック)

日時:2022 年 8 月 26 日 12:00~17:00

会場:やまぎん県民ホール

我々は北海道各地より札幌に集い、菊川会長のもと役員会や理事会、そして委員会を行っている。

この度、皆様を代表して、津軽海峡を越え、山形研修に赴くことは、北海道 PTA 皆様の想いを背負ったミッションと心得ている。そして、他県の活動を北海道に持ち帰る貴重なイベントであるため、詳細を報告する。

今回参加した副会長の 3 名はいずれも道 P 連(北海道 PTA 連合会)役員 1 年目であり、貴重な学びの場に『是非参加させていただきたい!!』という思いで立候補した。



↑この時は、まだまだ元気なお三方(会場では一番前!)

前置きはさておき、我々が参加した研究会は文部科学省が提供する特別第 2 分科会【メディア・リテラシー育成における学校教育と家庭教育の役割～子供たちのメディア・リテラシー教育を考える～】である。

【メディア・リテラシー】この言葉は聞いたことがあるだろうか?メディアとは 20 年以上前から新聞・テレビなどのいわゆるマスコミのことであり、現在ではインターネット普及によって SNS(Social Networking Service)に置き換わってきている。そしてリテラシーとは“理解し活用する”という意味である。つまり、文部科学省が GIGA(Global and Innovation Gateway for All)スクールとして、児童生徒には一人一台端末が支給され、ICT(Information and Communication Technology)環境を充実させようという構想には切っても切り離せないもの、それがメディア・リテラシーである。

分科会の中で基調講演と分科会講演があった。内容が重複しているため基調講演の内容と感想をまとめる。

講師は信州大学教育学部 准教授の佐藤和紀氏。元小学校教諭、2人の子をもつ父親という観点から、PTA としての想いも聞く事ができた。

佐藤氏は『教師として 10 年前からコンピュータの講義を行っていて、コンピュータの重要性を保護者に知ってもらおうと同時に、子供が体験し何を感じるのかという事に気を付けて指導していた』と語る。そんな指導を続けるうちに、『板書しないコンピュータの授業を理解してくれない保護者に出会う、そしてその保護者が、ある時から変心した』という例を示した。英語の授業でプレゼンの授業があり、子供たちが主体となり、『どんなプレゼンが人の心に響くか』を考えながら修正を重ねていく授業であり、その授業を見て『これから社会で利用していくコンピュータと向き合い子供だけで修正していく姿を見た時に、この授業の重要性を初めて理解してもらえた。』という例である。そして、コンピュータを使用するにあたり、メディアを通じてどのように学んでいくのかが重要であるという話に進む。

イギリス BBC 制作、1957 年に作成され、2003 年に日本語に翻訳された【スパゲッティに関するドキュメンタリー】を紹介するという。

佐藤氏からメモを取るように促され、動画に関する内容を記録した。

- スイスとイタリアの国境付近にあるルガーノという町の話
- スパゲッティは植物であり、スパゲッティ農家が栽培している
- スパゲッティゾウムシという害虫から守らなくてはいけない
- どのスパゲッティも同じ太さと長さにするのが難しい
- スパゲッティ農家の皆さんが頑張っているおかげで美味しく皆がスパゲッティを食べられる

という内容だが、初見ではこれくらいしかメモすることが出来なかった…。

※ 上記動画を検索すると、イギリスで当時放送されていた現在も放送中の【パノラマ】というテレビ番組の動画を YouTube で発見したので URL を記します(会場で見た動画は日本語翻訳済みであったが、リテラシーを発揮できず、翻訳化された動画の発見に至らなかった)。

https://youtu.be/tVo_wkxH9dU



↑ スパゲッティ栽培の様子(「スパゲッティの木」より転載)

もちろん会場は絶句、佐藤先生が会場の参加者に何を感じたか聞いても失笑しかできない状況であった。

私も佐藤先生が何を言わんとしているのか理解できずに、「スパゲッティは小麦だろ！何のおふざけだ？スパゲッティゾウムシ？植物？？どういう事？？」と混乱した。

しかし当時イギリスではパスタはあまり食べられていない時代。放送終了後、『どこで手に入るのか？』という内容で 3,000 件の問い合わせがあったと説明。そして、『実はコレ、エイプリルフールのフェイクニュース』と発表した。その後、テレビ局にたくさんの苦情電話があった。

佐藤先生はこの動画を通して、『「メディアを通して知り得た事だけでなく、真実を見極める」この事を子供たちに教えなくてはいけない』と教示し、メディアが“だまされている人”だけの話を報道すると、“だまされていない人”も勘違いしていくのがフェイクニュースその恐ろしいところであると説明した。

次に佐藤先生は『見る事だけではなく、体験することも重要』だとも説明を続けた。

『バウムクーヘンの作り方は知っていますか？調理マシンで作っているのですが、長野県の信濃村の風物詩で“バウムクーヘンの天日干し”がされているという記事があるのです (<https://kyoko-np.net/2005021501.html>)。知っていることのほとんどは見た事であり、体験したことはない。皆さんの様にスパゲッティの作り方を知っている人は農作物であることは誤りだと認知しているが、子どもたちは本当に理解しているのであろうか？バウムクーヘンは天日干しするものではないと知っている？こういった状況の中で子供たちはどれくらいメディアを読解していくのであろうか。』と日本の子供たちが読解力を低いのではないかと危惧していた。



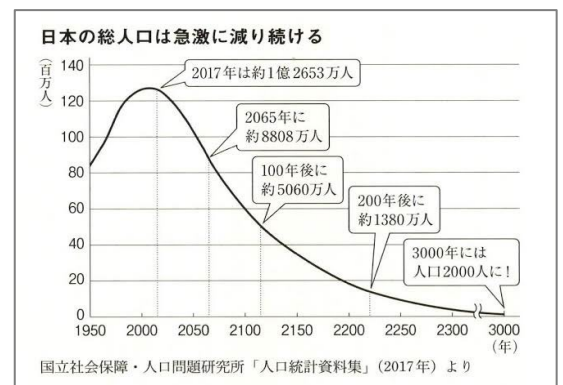
↑長野県信濃村バウムクーヘン天日干しの様子(虚構新聞より転載)

この2つの話を聞き、私は「自分の当たり前を子供に押し付けてはいないか」を考えさせられ、メディアとの「付き合い方」「使いこなし方」、そして「どんな力をつけるべきか」「大人は何が出来るか」「学校では何ができるか」という事を考え直さなければならなかったと感じた。

そして佐藤氏は『大学入試に【情報】という学科が増える。』と続け、その授業での取り組みを教示した。

【30歳の私を予想する】という内容で、『AIが発達し、“10年後にある職業”と“10年後にない職業”があり、そのことを予測しながら学ぶという事が大事』だと説明。

河合雅司氏の“未来の年表”をみて、日本はどのような状況になるのか、どのような職業が残るのか、そんな時代に対応するために GIGA スクール構想が必要と口調を強めた。



↑佐藤雅司氏「未来の年表」より転載

今までの教育は一斉授業で同じ時期に始めて、同じ時期に終わる。これは一人一人にあった教育ではない(個別的な学びではない)。

多様な子供たちが集まる学習の方が子供は伸びるのではないか(協力的な学び)。つまり主体的・対話

的で深い学びが必要なのであり、これが資質能力の育成につながる。

逆に一斉指導の学校は危ない。そんな学校は国から配布されている端末を使用していない傾向にあるのではなからうか。

そんな一斉指導には限界があるともいう。具体的には、『先生は子供たちの表情や態度はわかる。だが、気持ちや授業の理解度はわかっていない。分かったつもりで終わらせている。ただ授業内容が理解できている子が主体になっているだけの状況である。』と持論を展開した。

そこで必要なことは多様な学びなのではないかという。ICT を駆使しながらメディア・リテラシーを育成するということが重要であり、具体的には【実験して確かめる】【表計算で表にまとめグラフ化】【プログラミングでシミュレーション】そしてこれは先生がいなくても自ら課題をたてて学習し、振り返り、次の課題をたてられる。ここまでできれば文句の付け所はない。ここで佐藤氏がみた、ある1校のモデルを示した。

【とある学校では、先生がコロナになっていても自分たちだけで Google Meeting で URL を発行し、学習に取り組む事をしていた。】

佐藤氏は、『話し合いながら自分たちに課せる主体性が素晴らしい』と語った。

私も、ICT はいつでもどこでも多様な子供の学びを保証してくれると同感である。体調不良でもクラウドから参加する。そんな文化を日本に作っていくことが大事で、大学入試【情報】の学科は自然に養われていくのではなからうかと期待に胸が膨らむ。

保護者が子供に指導するうえで気を付ける事は、「ふざけてやらない」「悪口いわない」「メディアを上手に利用できる」「悪用しない」と、これらに気を付ける目を日頃から養うよう心掛けると言いました。そして、ネットに繋げることが悪い事でなく、使い方を指導できない大人が悪い。結果 GIGA が進んでいかないという悪循環になるのである。

『大人になってからの失敗よりも小さい子供の時に失敗させよう。いつか失敗するのだから、早めに失敗させて大きな失敗にならないように失敗の芽を摘んでおく必要がある。だからこそ、どんどんネットを繋げよう！そして若いうちに失敗しよう！！』と佐藤氏は説く。

確かに！大人の社会でも同じだよな。仕事でも覚えるためには人から奪ってでも仕事をしなけりや結局仕事にならんよな。失敗して覚えることも必要だよな。と、昭和的な考えで時代錯誤と言われかねないが「若い時の苦労は買ってでもしろっ精神」をお持ちの方は会場に多く、共感の嵐だったと思われるのは私だけではないはずだ。

佐藤氏が指導する大学での教員養成内容を示す。

【オンライン授業を教師役で行う】【フルクラウドで模擬授業を行う】【教育実習船用のアカウントの配布】【クラウド授業の必修化】

そして実際に大学でも今年度よりメディア・リテラシーに関する授業の必修化が行われると続けた。

現在は教育学部に入っても、卒業したら教員にならない選択の人が多く教員採用試験の倍率も 2～3 倍程度しかないと危機感をあらわにした。場所によっては2倍を切る事もあるよう。

私の知っている方も教育学部を卒業しているが教師にならなかったと言っていた。教員の忙しさ問題がとりだされている昨今、奉仕の精神だけでは立ち行かない事は保護者としても理解している。その反面、その思いを盾にとり、権利ばかりを主張するという話も散見する。しかし、教師のなり手がいない等、採用試験の倍率が低い事から教師のレベルが低くなってしまうことも危惧されるのではなかろうか。

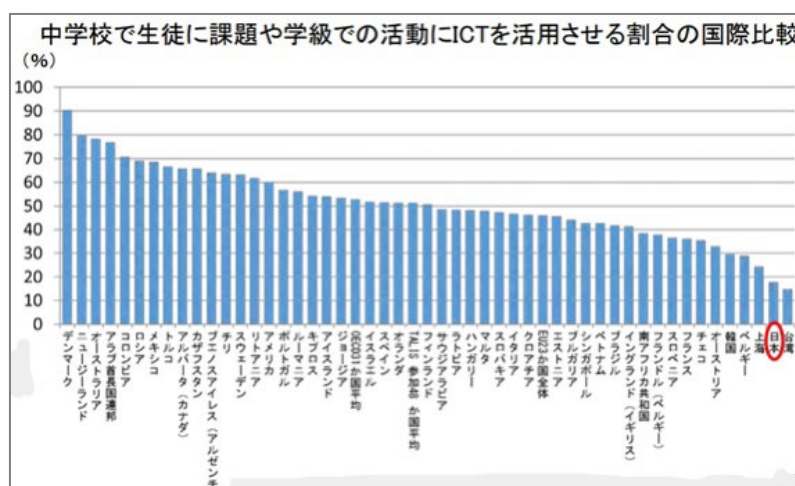
そういう私も幼いころの夢は教師でした。現在は地方の PTA 会長として学校教育にかかわってはいるが、信州大学の様に教育養成から誘導するアプローチもメディア・リテラシーによって活発化することを願う。



↑Yahoo ニュースの画像より抜粋
「教員の未払い賃金」による記事から

最後に佐藤氏はメディア・リテラシーが基盤となるものについて説明した。

【調べる】【整理する】【まとめる】【伝える】【振り返る】これら 5 点の基盤があるが、自分で考えなければならぬと仰っていた。そして日本の ICT の活用は経済協力開発機構(OECD:Organisation for Economic Cooperation and Development)加盟国で最低水準、さらにアジアでも最低水準である。(3)



↑OECD 加盟国で見た ICT 使用割合の国際比較

この水準を上げるためには積極的に端末を家庭に持ち込み、メディア・リテラシー教育を発展させ、読解力をあげる必要があると締めくくった。

私は、メディア・リテラシーの基盤 5 項目が達成できて、はじめて情報収集をしたといえるという事だと理解した。その情報収集の中で、【情報の発信元】【どの立場から】【誰がまとめた物】【別の情報元では】を理解しなければいけない。また、学校でも保護者に子どもの学び場を積極的に見せる事で、親の理解を広げていただきたいし、もちろん家庭でも常に発信を続け、色々な事を経験させ、時には失敗も重要。ICT を扱う態度の育成も兼ねて学んでいけるように子供たちを誘導したいと思った。